

図書館に通う・図書館で考える・図書館を制覇する

附属図書館副館長 田 中 一 郎

新入生の皆さん，入学おめでとうございます。
これからは金沢大学附属図書館の二百万冊近くの蔵書を活用して，充実した大学生活を送っていただきたいと心から願っています。大学では，小・中・高等学校のような文部科学省の指導要領に従った，どの学校でもほとんど同じことを教える教育が行われる訳ではありません。たとえば共通教育で西洋史という科目があったとしても，古代ギリシアから20世紀のヨーロッパまでを教えてくれることはないでしょう。物理学や化学であっても，それらの初歩からたとえば量子力学まで教えてくれることはないかもしれません。半年間，15回という時間の中で何かを深く教えようとすれば，範囲を限らなければならぬからです。もっと深く知りたい，もっと深く勉強したい，あるいは初歩のところから勉強したいと思ったとき，附属図書館は皆さんの希望をかなえる場所となるでしょう。附属図書館では，研究のための本だけではなく，授業内容に関連した勉学のための本もまた絶えず充実され続けているからです。

もっとも，大学で講義されている内容は，知識として考えるならほとんどがインターネットで検索できる時代になってしまいました。ちょっとした調べものなら，何巻もの百科事典を引くよりははるかに短時間で答えがわかっています。重い辞書を持ち運ぶよりは電子辞書でもっと手早くすべての単語の意味がわかるようになったのも確かなことです。

残念なことに，インターネットでの検索は，キーワードが前もってわからなければ無力だということは忘れられがちです。不適切なキーワードを入力したために期待したものが見つから

なかったり，あまりにも多くのものが見つかってしまい結局は役に立たなかったりする経験は誰でもしたでしょう。インターネットでの検索は，よく行っても，調べたいと思っていたものだけが，キーワードを入力した人物の知識レベルに応じて見つかるということもできるかもしれません。

図書館では予想もしていなかった本と出会い，インターネットで検索しようにもキーワードすら思いつかなかった情報と出会えるかもしれないのです。そういう意味では，図書館は調べものをする場所であると同時に，発見する場所でもあるのかもしれません。

14世紀イギリスの宮廷人，リチャード・ド・ベリーという人物が書いた『フィロビブロン(書物への愛)』(邦訳は，古田暁訳，大阪フォルム画廊出版部，1972年)という本には「知恵の宝はおもに書物のうちに収められている」という章があって，書物は「質疑に対して身を隠し，こちらのまちがいに声をあげず，無知を笑わない」と語られていて，書物こそが勇気をふるって門をたたく者に深遠な知恵を与えてくれると述べられています。

何か目的があって図書館に行くというだけでなく，目的がないから，極端な言い方をすると，することがないから図書館に行くということでも十分だと思えます。束の間，他人の考えていることに触れてみる，他人の人生を生きてみる，それだけでもロールプレイング・ゲームであらかじめ仕組まれていた結末に辿り着くという怪しげな，本物らしからぬ他人の人生を疑似体験することが与えてくれる喜び以上のものがあると言えきでしょう。図書館で初めて出会っ

た本，初めて出会った図書館職員，すべてが大学生活，そして人生を豊かにしてくれるはずで
す。

もちろん利用できるのは金沢大学附属図書館の蔵書だけというわけではありません。大学の図書館を通じて地域の図書館を，そして世界中の図書館を利用することが可能です。この場合には，インターネットを通じて世界各地の図書館の蔵書目録にアクセスしてみるだけでも面白いでしょう。図書館にはそれぞれの特徴があって，収集している本の分野も違い，目録の作り方も違っていたりします。イタリアだけでも，フィレンツェの国立図書館は論文集の中に収められている論文まで図書カードを作っています。日本では，一冊の本であれば，その書名と編者名だけで，本の中身である複数の著者による論文まで記録することはありませんから，発見の機会はそれだけ多いわけです。同じフィレンツェにある科学史研究所の図書館は，他の図書館にある貴重な書物のコピーを数多く収集していることで特徴を出しています。日本の図書館であれば，コピーを熱心に集めるということなど考えられないかもしれませんが，そこに行きさえすれば科学の発展に貢献した本と論文が読めるという点では利用価値の大きい図書館です。しかも，国立図書館で職員に監視されながら貴重本を読むという苦痛から解放されるわけです。この研究所の自慢は別にもあって，附属の博物館にガリレオ・ガリレイが手ずから作った望遠鏡と，何と彼の右手の中指が展示されています。この研究所にとってガリレオは聖人であり，中指の骨は聖遺物ということなのでしょう。あのヴァチカン図書館は，中世ヨーロッパの貴重本のほぼすべてを持っているということで特筆されるべきですが，もうひとつの特徴も忘れられるべきではないでしょう。それは，世界各国の主だった図書館の蔵書目録が集められているということです。もっとも，日本については上智大学附属図書館とか南山大学附属図書館の蔵書目録というようにカトリック系の図書館に限られてはいますが。一つの部屋のすべての棚に収められた目録の中には，イスタンブール最大の

アヤソフィア・モスクのものもあって，この中にある本はコピー依頼できるのかと訊ねたところ，即座に帰ってきた答えは「使えない目録は置いていない」でした。こうした世界の図書館を訪ねる出発点として大学附属図書館を利用することも可能でしょう。つまり，附属図書館の窓は世界中に開かれており，世界中の本が読まれるのを待っているのだと考えることができます。

あらゆる図書館はあらゆる者に開かれているべきであり，あらゆる本は読まれるためにあるのですから，図書館職員を煩わして本を捜し求めるのは遠慮すべきことではないのです。リチャード・ド・ベリーも言っているように，「書物収集は学徒の公益を目的とし，自己満足のためではない」のですから。彼は当時としては最大級の蔵書家であったことで知られていますが，その蔵書数は千五百冊ほどであったろうと見積もられています。金沢大学だけでもその千倍以上の本が皆さんに利用されるのを待っているわけです。

ただし，この『フィロビブロン』の著者は，学徒たちが「書物を開いたまま果物やチーズを食べ，注意を払わずコップを口に」運んだり，「腕を組み書物の上に寄りかかり，短時間勉強したかと思うのも束の間，次に長時間のうたた寝に移る」ために，本が台無しになってしまうと嘆いていることもお忘れなく。



田中 一郎

TANAKA Ichiro
2006年4月1日から
附属図書館副館長。
大学院自然科学研究
科教授。